



## < 藤井啓行教授追悼文 > 藤井啓行さんと私

著者	丸山 三友
雑誌名	独逸文學
巻	39
ページ	10-11
発行年	1995-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018236">http://hdl.handle.net/10112/00018236</a>

## 〈藤井啓行教授追悼文〉

### 藤井啓行さんと私

丸山三友

藤井啓行さんが遠逝されて半歳と1週間を経過した。しかし、2年前のたしか6月下旬であったか、新千里での胆石切除の手術後直ちに名古屋の専門病院に転院され、さらにその後は今年の2月まで入退院を繰り返して学科をながく留守にされていたせいも、私は藤井さんがいまなお名古屋で長期の療養生活を送っておられるかのような錯覚を起こす時がある。

私が初めて藤井さんにお会いしたのは、胃潰瘍の治療とかで初出講が少し遅れた1959年4月の下旬、場所は当時の独逸文学科の研究室のあった大学院ホール地下の上道直夫教授の個人研究室。学科は新しい研究棟の完成までまだ合同研究室を持っていなかった。関西大学独逸文学科の創設者である上道教授の御努力によって、学科の進展が着実に軌道に乗り始めた時期に、藤井さんは我々若手の4人目の同僚として、金沢大の教養部から赴任されてきた。因みに記すと、この独逸文学科へは1957年4月1日付で私、その月末に脇阪豊氏、58年4月1日に上村弘雄氏、その翌年に藤井さんが、それぞれ講師、助手、助教授として採用され、在籍することになったのであるが、この4名、生年は1928年から30年と年齢差も殆どない同世代人であり、上道教授を始め5人の教授の先生方の下にあって、ひとつの緩やかな結合の若手集団として、共に過ごした数年を今は懐かしく思い出す。

ところで、藤井さんは大阪に、私は京都と全く異なる土地柄に生まれ育ったが、振り返ればあの盧溝橋事件の勃発がともに小学3年の7月であり、この武力衝突は周知のようにその後8年に及ぶ日中戦争へと展開し、また旧制中学1年の12月には太平洋戦争への突入と、終りの見えない常に緊迫した時代の奔流に翻弄され、さらに戦後はすべての価値観の崩壊と混乱のなかで進学して、独仏両外国語のうち同じ敗戦国のドイツ語を選び、続い

て大学ではドイツ文学を専攻するなど、所は異にしても、少年期から青春期を同じ激動の社会に同じ道程を辿った全くの同時代人であった。また時代が及ばず影響は個人差を超えて同時代人に或る種共通の刻印を与えるものであり、同期生のみに通ずる言わば無言の符牒のようなものを私と藤井さんとは共有していたかに思われる。二人を結ぶ絆があるとすれば、その根本はこれであろう。

藤井さんの関西大学文学部在職は残念なことに35年で終わったが、しかし、この間藤井さんはいくつかの要職にあって立派にその重責を果たされた。研究者としてもまた藤井さんは業績の蓄積にも極めて積極的であり、多くの仕事を残された。尤もその意欲が昂じたあまりのいくつかの勇み足もあるにはあったが、さらに敢えて言えば、藤井さんは世代に共通するロマンティスト的な側面をもちながら、それにも増して、鋭敏な現実感覚をそなえて常に優位を目指す上昇志向型のリアリストでもあった。その是非はともかくとして、在職年数を重ね、学科に対して何らかの責任ある立場にあれば、学科を優先し後輩に配慮してきた積りの私とは、学科内では対照的ではなかったかと考えている。

言うまでもなく、人はこの世に生を享けた瞬間から、いつか先の死は不可避の絶対的な約束事である。だが死によって人は直ちに永遠に消滅し去るのではない。私が好んで教材に採り紹介してきたシュニツラーの作品のひとつ、BLUMEN (1894) の中に次のような表現がみられる。—Ach, wir verstehen den Tod nicht, nie verstehen wir ihn; und jedes Wesen ist in Wahrheit erst dann tot, wenn auch alle die gestorben sind, die es gekannt haben... 生と必然的に絡み合う死を様々な形相で描いて示すシュニツラーの、これはまた実に簡潔な生者と死者の関係の把握であるが、まことこの通り、藤井さんは御家族、血縁の人達は勿論のこと、友人、我々同僚など藤井さんを知る人すべての心の中にそれぞれの形で、なお永く生き続けていかれるであろう。

1994年 9月 1日記